

アウトサイド・イン構想
—— イランのA2/ADを打倒する ——



マーク・ガンジンガー／クリス・ドアティー
(訳者：能條 将史)

Mark Gunzinger with Chris Dougherty, “Outside-In: Operating from Range to Defeat Iran’s Anti-Access and Area-Denial Threats,” (*Washington, D.C.: Center for Strategic and Budgetary Assessments* (CSBA), 2011).

Mark Gunzinger, “Outside-In: Defeating Iran’s Anti-Access and Area-Denial Threat,” (*Washington, D.C.: Center for Strategic and Budgetary Assessments* (CSBA), January 20, 2012).

翻訳の趣旨（訳者）

本稿は、2012年6月、米国の「戦略・予算評価センター（CSBA）」が発表した「イランのA2/ADへの米軍の対応」に関する論文である。CSBAは、西太平洋における「エアシー・バトル（Air-Sea Battle）」構想を体系化したことでも知られるシンクタンクであり米国国防総省ネットアセスメント局と関係が深い。したがって、本論文が今後の米国軍事戦略に何らかの影響を及ぼすことも予想されるので、ここにその「要旨」及び別稿の「背景説明」を抜粋して訳出した。なお、筆者のガンジンガー（Gunzinger）氏は、現在はCSBAの上級研究員であるが、2004年に国防副次官補（軍再編・財源担当）（Deputy Assistant

Secretary of Defense for Forces Transformation and Resources) に任命されて以来、国家安全保障会議 (National Security Council) 上級スタッフとして QDR (2006年) やイラク撤退計画 (2007年) 策定など国家レベルの政策決定に携わった経歴を有する。

背景説明 (Backgrounder) (抜粋)

オバマ政権は、アジア太平洋地域に“リバランス”すること、また、接近阻止 (anti-access) / 領域拒否 (area-denial) (A2/AD) の挑戦にもかかわらず、戦力投射する能力を維持する意向を表明した国防総省の新たな戦略ガイダンスを公表した¹。米軍は、これらの目標をサポートするために必要な計画及び資源取得への取り組みを分析したのであるから、イランの新興のA2/AD戦略に対処する必要性と、ペルシャ湾の平和と安定にそのA2/AD戦略が及ぼす脅威を忘れてはならない。

イラクからの米軍撤退をきっかけとする、いわゆるアラブの春と核兵器を開発するイランのますます見え透いた努力からは、国防総省はペルシャ湾における将来の計画と軍の展開態勢について再考する時機にある。このような抜本的な見直しが最後に行われたのは、ソ連の侵略脅威が国防総省の計画や資源配分の優先順位を左右した時であった。その時の見直しに起因する多くの仮定 (assumptions)、それは米国が近隣基地へのほぼ自由なアクセスを享受することと、ペルシャ湾における海空覇権に対する課題がほとんどないと信じた仮定だが、現在では時代遅れかもしれない。これらの仮定は、短距離型航空機、非ステルス性システム、その他の寛容な環境下での作戦にのみ最適な能力を支持する国防予算配分的意思決定について時間をかけて裏支えしてきたのである。

CSBAの最新レポートである、「アウトサイド・イン：イランのA2/ADを打倒する(ため距離をおいて作戦する) (Outside-In: Operating from Range to Defeat Iran's Anti-Access and Area-Denial Threats)」は、ペルシャ湾の安全保障環境が、今後の20年に如何に進化して行くかに関する評価に基づき、新しい仮定のセット、候補となる作戦構想及び米国と同盟国やそのパートナーに

¹ U.S. Department of Defense, *Sustaining U.S. Global Leadership: Priorities for 21st Century Defense* (Washington, DC: Department of Defense, January 2012), pp. 1,4.

とって重要な利益がある地域での安定した軍事均衡を維持するための部隊配備態勢を提案する。具体的には、「アウトサイド・イン」は、ホルムズ海峡を管制して、ペルシャ湾における米軍の時機を得たな戦力投射を阻止するように計画している新興のイランA2/AD戦略に対処する作戦構想である。

一つ前のCSBAの評価（エアシー・バトル）では、西太平洋における米軍の行動の自由を制約することを企図する中国のA2/AD兵器の発達について記述した²。イランもまた、ペルシャ湾において、時機を得た米国の軍事作戦を抑止、遅延または阻止する能力を追求している。その能力は、イランに地域内での侵略や強制行為を行うのに必要な余裕を与えてしまう。もちろん、イランには、中国と同程度の規模かつ洗練されたA2/AD兵器複合体を開発する資源が不足している。その代わりに、イランは、ペルシャ湾の独特な地理的属性を活用するようにデザインした非対称、またはハイブリッドなA2/AD戦略を進めているように思われる。イランは、むしろ、直接的に米軍と立ち向かうのではなく、湾岸諸国が、彼らの領土から米軍が作戦する許可を拒否することを強要するために弾道ミサイルやテロリスト集団代理人（おそらく高度な戦術的兵器で武装）を使用することを試みるであろう。この間接的なアプローチが失敗に終わっても、イランは、直接、米国の前進基地と展開部隊をターゲットに設定できる。これらの攻撃は、ホルムズ海峡を管制するために、機雷、対艦巡航ミサイル及び高速攻撃艇の大群を用いた海上排除作戦を補完できる。イランは、米国との対立をエスカレートさせることを選択するかもしれず、中東全域を攻撃するために弾道ミサイルや武装代理人集団を使用するであろうし、または大量破壊兵器（WMD）の使用について脅すことさえもするかもしれない。

イランが、現時点では、効果的にそのような戦略を実行するための軍事力を欠いていることに留意するのは重要だが、イランが行っている努力からは、その目的が可能な限り迅速にその能力を獲得することであることは明らかである。米軍は、重大事象に対処する立場に立つよりも、むしろ、イランを見越して、イランにA2/AD能力を配備することを思い止まらせ、もし配備を許してしまった場合はその使用を抑止、そして抑止失敗の場合には米国と地域パートナーの

² See Andrew F. Krepinevich, *Why AirSea Battle?* (Washington, DC: CSBA, 2010); and Jan van Tol with Mark Gunzinger, Andrew Krepinevich and Jim Thomas, *AirSea Battle: A Point - of - Departure Operational Concept* (Washington, DC: CSBA, 2010).

利益を確保するために軍事作戦を必要に応じて遂行するための戦略を開発するのがはるかにベターである。

要旨 (Executive Summary)

ソ連崩壊後、米軍は、行動の自由への深刻な課題がほとんど無しに海外へ戦力投射することができた。米国の戦力投射のこの“黄金時代”は急速に終わりに近づいているかもしれない。CSBAによる以前の分析（エアシー・バトル）で説明したように、中国は、空中、海上、海中、宇宙及びサイバー空間の作戦領域における米軍の機動を制約する A2/AD バトル・ネットワークを開発している。今後、高度な軍事技術の普及が、他の国家がその地域に特有の地理的、地政学的特性に仕立てた (tailored) A2/AD 戦略を追求することを可能にする。

特に、イランは、ペルシャ湾での効果的な米軍作戦の抑止、遅延、または阻止に使用できる新たな能力に投資している。湾岸へのアクセス拒否、湾岸地域からの石油とガスの流れを制御、また、侵略や強制行為に使用できる武器をイランが取得することは、米国とその安全保障パートナーにとって重大な懸念である。

米国は、イラクとアフガニスタンからの部隊を配置転換するのであるから、イランの成長する軍事力を相殺する戦力投射の新たな作戦構想を作成する機会にあるだろう。この新たな作戦構想の作成作業は、国防総省に、ソ連の侵略脅威がペルシャ湾不測事態の米軍作戦計画を操っていた約 30 年前に設定した仮定を変更することを要求する。この計画策定の枠組みは、米国が近隣基地への自由アクセスを享受して、米国のバトル・ネットワークは無傷で安全なままであり、そして、ソ連と地域勢力のどちらもが、海上・航空輸送路に深刻な脅威をもたらさないと仮定している。これらの仮定は、時間が経つにつれて、短距離型航空機、非ステルス性システム及び寛容な環境下での作戦だけに適したその他の能力を支持する国防予算決定へとつながった。

イランが A2/AD 能力を追求していることに鑑みれば、米軍の従来計画策定上の仮定が、有効なままであるとは考えにくい。過去 20 年間、イランには、アメリカの戦争の仕方を調査して、イラン国境に圧倒的な戦闘力を結集することを米国とその同盟国に許容することは、敗北への処方箋であることを導き出すのに十分な機会があった。したがって、イランは、近隣基地への米軍によるアクセスを拒否する方策と、法外なコストを支払わなければ米国がペルシャ湾

で伝統的な戦力投射作戦を行うことをできなくする方策を追求している。

ペルシャ湾の特性を伴う A2/AD

米国との直接軍事対決におけるイランの弱点と結合されたペルシャ湾地域固有の特性は、イランが、米軍の基地アクセスと海上での行動の自由を否定するためにゲリラ戦術と高度な技術を兼ね備えた非対称ハイブリッド A2/AD 戦略を追求することを示唆している。

イランは、可能な限り、米軍との直接対決を避けることに努め、代わりに、米国が湾岸地域にある基地から作戦することを拒むため相対的に弱い国やおそらく数少ない毅然とした国に対して強制行為を行うことを選択するであろう。人口密集地、政経中枢、また多大な地域の富が、イラン弾道ミサイルの射程内にあるほんの一握りの都市部に著しく集中している。湾岸地域都市部の価値ある目標への攻撃 (counter-value strikes) は、ほとんど直接の軍事的有用性はないが、湾岸地域の各国政府に与える心理的、政治的な影響は大きいであろう。特に、イランが、生物、化学、放射性物質、または核弾頭をミサイルに搭載する能力を示した場合には、それは深刻であろう。イランはまた、米国に同調する国においてテロや暴動による扇動行為を起こすため南西アジアの至る所に主としてシーア派の代理人グループのネットワークを結集することができる。イランは、誘導ロケット、大砲、迫撃砲、ミサイル (guided rockets, artillery, mortars and missiles(G-RAMM)) で、その代理人グループを武装させるに違いなく、今よりはるかに危険度は増すだろう。レバノンのヒズボラのような他のグループは、危機を拡大し、米国の後方エリアー米国本土でさえもーを危険にさらし続けるように企図したテロのキャンペーンを展開するかもしれない。

この間接的なアプローチが成功しなくても、ペルシャ湾の米軍基地と部隊を直接攻撃するため、イランは、弾道ミサイルと代理人の部隊を使用することができるだろう。イランのハイブリッド戦略は、その海軍部隊が、ホルムズ海峡及びおそらくオマーン湾という監禁され混雑した沿岸海域において、高度な誘導武器を使用した群衆によるヒット・エンド・ラン攻撃を行うことへと続くであろう。イランは、これらの攻撃と、対艦巡航ミサイルの一斉発射及びイラン沿岸とペルシャ湾入口をガードしている島々の両方から発射する無人航空機の群れをコーディネートすることができるだろう。イランは、このハイブリッド A2/AD 戦略を実行するために必要な能力への投資に着手しており、今後 20 年

間に大幅にその能力を向上させて行くであろう。この観点から、米軍は、将来のペルシャ湾不測事態の新たな作戦構想を策定すべきである。その作戦構想は、近隣基地が利用できず、すべての作戦領域で争われ、また、ペルシャ湾へ米国が成功裡に軍事介入することを抑止または阻止するために核兵器使用を含んだテロやWMD攻撃で脅かされることを前提としたものである。

有効な作戦構想 “アウトサイド・イン”

本稿では、イランの A2/AD 戦略の成就を阻止して、米軍の行動の自由を取り戻すために3通りの作戦を提案する。

- ▶ イランの A2 (anti-access) 脅威リーチの外側 (アウトサイド) から初期作戦をサポートするため部隊展開しながら、イランの強制と侵略を抑止、または撃破する条件を設定する。
- ▶ イランの ISR (Intelligence, Surveillance, Reconnaissance) 能力を劣化させることにより、また、弾道ミサイル、海上排除能力及び防空網を含んだ攻撃・防御システムの密度を減少させることにより、イランの A2/AD 複合体の有効性を低下させるため、距離をおいて作戦する。
- ▶ 後続部隊の展開と、シアターでの方面作戦 (campaign operations) をサポートするため、必要な時と場所において、ホルムズ海峡を介した制海を含んだローカルな海上・航空優勢を確立する。

これらの作戦は、イランの新興 A2/AD 戦略に対抗してペルシャ湾へのアクセスを維持する目的で、拡張した範囲から戦うため米軍の能力を上手く使用するようデザインされているのである。したがって、この作戦構想は、米国の海上・航空アセットをイランに近い現在の場所から、イラン攻撃アセットの射程外の基地や海上作戦エリアへ再配置することを要求する。

この有利な態勢から、米軍はその後、イランの A2/AD 複合体の密度を低減し、後続の作戦を行うために必要な行動の自由を取り戻すことができるであろう。また、米軍は、包括的な方面作戦の一環として他の作戦も行う準備をするべきである。それらの作戦には、次を含むであろう。

- ▶ イランが、核兵器を含む WMD を移転、または雇用することを抑止する。抑止に失敗したならば、その使用を阻止して核攻撃の影響を減少させる。

- イランによる南西アジア各地のテロリスト・グループへの武器再供給の防止のためにも、G-RAMMを装備する代理人グループに対抗する。
- 戦争努力を継続するために必要なエネルギー・インフラと、他の重要な目標を攻撃することにより、テヘランにコストを課す。
- 必要な場合、イラン内部から政権転覆の条件設定ができる非在来戦(Unconventional Warfare)を遂行する。

能力取得と前方展開態勢確立への取り組み

国防総省は、有効な作戦構想を実行に移すために、現行のプログラム計画書の一環ではない新たな能力と多様な前方展開態勢を整える必要がある。ますます制約される予算の範囲内でこれを達成することは、防衛計画の担当者が、困難な意思決定を行うことを必要とするだろう。つまり、米国は、単に多額を費やして新しい機能とキャパシティーを追加することによってでは、イランが湾岸において米国の死活的利益にもたらす課題に対処することができないのである。現在の予算の実情に照らせば、国防総省は、性質上、ますます非許容な環境下での作戦に必要な能力の優先順位を決定するために、寛容な環境下に過剰に最適化した能力への重視度を減ずることによって、そのポートフォリオ(書類かばん)をリバランスする必要があるかもしれない。興味深いことに、西太平洋のためのエアシー・バトル構想と、ペルシャ湾のための作戦構想であるアウトサイド・インをサポートするために必要な能力には、かなりの範囲のオーバーラップがある³。例えば、両者が、貫通型爆撃機(penetrating bombers)や空母艦載型無人航空機(carrier-based unmanned aircraft)などの新たな長距離システムの開発、海軍スタンドオフ兵器の海中弾薬庫(保有量)の増加、防空・ミサイル防衛能力の向上、敵部隊の作戦計画を複雑にする前方展開態勢の確立を追求する必要性について強調する。

このレポート(アウトサイド・イン)は、ペルシャ湾のための有効な作戦構想をサポートするため、次の取り組みを推奨する。

サーベランスと攻撃能力 米軍は、劣化または拒否された通信環境下で作戦す

³ See Jan van Tol with Mark Gunzinger, Andrew Krepinevich and Jim Thomas, *AirSea Battle: A Point-of-Departure Operational Concept* (Washington, DC: CSBA, 2010).

るため、新たな長距離攻撃システムの一部をデザインする必要がある。また、イランの A2/AD 脅威を妨害、無能化または破壊するために、サイバー戦、電子戦及び指向性エネルギー・システムを含めて、非キネティック (non-kinetic) な能力を調達する必要がある。このシステムの一部は、高脅威な作戦環境下において、米軍空母艦載航空隊のリーチと持続性を拡張する空母艦載型偵察・攻撃無人航空機 (Unmanned Carrier-Launched Airborne Surveillance and Strike(UCLASS)) を含む必要がある。米海軍は、巡航ミサイルによるスタンドオフ攻撃能力の削減計画を部分的に逆転するため、将来のバージニア級攻撃型潜水艦への搭載用モジュールを統合すべきであり、また、水中監視ネットワークを拡張できる大型水中無人機を開発すべきである。

海上戦力 国防総省が、イランの海上排除能力に対抗するためには、群らがつて攻撃してくるボート及び対艦巡航ミサイルの一斉発射から防御するため、艦載型の固体レーザー (solid-state laser) を配備すべきであり、また、機雷と対艦ミサイルを運搬するため、新型の長距離攻撃爆撃機を装備すべきである。海軍省は、今後の遠征作戦の要求を満たした支援のために、地上戦闘任務に最適化され、統合シアター進入作戦をサポートするのに十分な水陸両用輸送キャパシティを保持した新たな水陸両用戦闘車両を装備すべきである。

誘導ミサイル及び G-RAMM 防御 米軍は、弾道ミサイルをブースト段階で迎撃できる空中発射型ミサイルを開発すべきである。同様に、現在のキネティック・インターセプターに比べて無視できるほどの単価で巡航及び弾道ミサイルへのターミナル防御を強化できる指向性エネルギー技術に投資すべきである。また、国防総省は、米軍部隊と前進作戦拠点に対するテロリストによる G-RAMM 攻撃への物理的バリアーを構築できる先進的な機雷及び非致死的能力を追求しなければならない

戦略輸送 国防総省は、計画されている C-17 生産ラインの閉鎖に先立って、紛争初期の段階でイランがホルムズ海峡及びペルシャ湾を介した海上輸送路をコントロールすることを想定した将来の戦略輸送の要件を評価するのが賢明であろう。

前方展開態勢の再編 米軍は、イランの A2 脅威のリーチ外から初期の戦力投

射をサポートするため、アクセス地点を共有する拡大ネットワークを形成しつつ、イラン弾道ミサイルの目標捕捉を面倒にするためペルシャ湾の米軍基地を分散及び強化すべきである。将来のペルシャ湾至近の態勢は、イランとその代理人による侵略行為への抵抗に寄与するミサイル防衛、パートナーの能力構築及びテロ対策というような活動を支援しながら、米軍の地上への全体的フットプリントを減らすように努めるべきである。パートナーの能力構築の優先事項には、早期警戒レーダー、弾道ミサイル防衛及び防空能力、短距離・中距離弾道ミサイル、フリゲート艦及びコルベット艦を有する対 A2/AD ネットワーク (counter-A2/AD networks) の形成が網羅されている必要がある。

要約すると、過去 30 年間の仮定は、アメリカの戦争の仕方に対抗するためにデザインした戦略を有した敵とのペルシャ湾での作戦に、ベストな計画の枠組みを提供しないだろう。イランが、A2/AD 兵器及びすべての戦闘領域にわたって米軍に挑戦するようにデザインされた他の非対称な能力を取得していることは、国防総省が、今後のペルシャ湾不測事態に向けた革新的な作戦構想を開発しなければならないことを強く示唆している。これらの作戦構想は、米軍の戦略、計画及び要求される機能の間の結合組織を提供することができ、また、横ばい若しくは減少して行く国防予算の時代における、投資事業の優先順位を決定するのに役立ちもするのである。

重要な補足 (An Important Caveat)

この評価では、ペルシャ湾での将来の米軍作戦への非対称能力の影響を説明するために“一定歩調の脅威”(pacing threat)としてイランの A2/AD 能力を用いているが、米国とイランの対立が不可避であると暗示する含意はない。それどころか、意図するところは、従来の抑止力向上に寄与する取り組みを特定すること、また、危機の安定性を向上させて、衝突を避けることにある。さらに、この評価では、潜在的な単一の衝突シナリオを前提としているが、実際のペルシャ湾での有効な作戦構想の候補については、様々な状況下での堅牢性を判断するために、典型的なシナリオ・セットに対しても検証されることが必要である。